

# AWAPURADIO

## アワプラジオ通信

2017.6

アワプラジオ通信は千代田区社会福祉協議会（東京・九段下）の中にあるちよだボランティアセンターに置かせていただいています。また、アワプラジオやメンバーがかかわるイベント等でも配布しています。バックナンバーがウェブサイトでダウンロードできます。置き場を提供くださる方も随時募集しています。発送を希望される方もお気軽にご連絡ください。

<アワプラジオとは> 認定 NPO 法人 OurPlanet-TV で出会った仲間、2009 年に開局したミニ FM、インターネットラジオ局です。名称は OurPlanet-TV の略称であるアワプラにちなんでいます（アワプラとは別々の団体です）。

編集長：阿部浩一 発行：インターネットラジオ アワプラジオ 105-0013 東京都港区浜松町 2-2-15 浜松町ダイヤビル 2F うんすい総研気付  
info@awapuradio.com TEL:03-6856-0722 FAX:03-6856-0723 http://awapuradio.com/

### 『Abe's VIEW』 Vol. 30 「おネエ系タレントと構造的暴力」

先日インターネットを見ていると、某バラエティー番組でいわゆるおネエ系タレントのみなさんが出演し、司会者であるお笑いコンビが「キス」や「鼻舐め」、「体をモミクチャ」などの「暴走」に巻き込まれる「災難」に遭ったという記事を目にして、調べてみるとこの番組についてはいろいろなネットメディアが面白おかしく取り上げていました。

番組を観たわけではありませんが、これでまた多くの人の頭の中におネエとゲイが混同されて、そっちの人たちってみんなこんな感じなのだということが上書きされるのだろうなと暗澹たる気持ちになりました。タレントの「暴走」は番組上の演出も含まれているのであろうとはいえ、メディア（特にテレビ）はいつだってそうです。言うまでもないことですが、ゲイだっていろいろな人がいて、その中にも雰囲気や物腰が女性的な人や女性装、突飛な行動を好む人もいますというだけで、むしろどこへでもいそうなお兄さんやおじさんという感じの人が大半です。

多様性の尊重が大事などと言いながら、自分が理解のできない、理解したくない、“得体のしれない”ものをあくまで非日常に存在する特別なものとして封印しておいて安心したい。そんな世の中の悪意と欺瞞がこういうかたちとなって現れているように思われるのです。番組を制作する側にすれば他意はなく、単に視聴率が取れるということがあるのでしょう。

特にテレビの影響力は大きいですが、メディアだけを悪者にするのも違う気がします。それを歓迎する視聴者によって誤解も生み出され、諸々の社会制度一つをとっても男女が一緒になることを前提に作られているこの社会で、名実ともに当事者の生きづらさが固定化されていく。日本で性的マイノリティは生きるに値せずとまで本気で考えている人は少ないでしょうが（地球上には同性愛は死刑になる国もありますが）、本当にこれは加害者を特定できない構造的暴力です。

おネエ系タレントは良いのです。ただメディアがおネエやゲイを取り上げるときはこういう切り口か、政治や社会運動で世の中を変えてやろうみたいな意識の高い人や一芸に秀でた人のクソ真面目な話の両極端です。あなたがいつも普通に接しながら、泣いたり笑ったりしている友達や同僚、先輩や後輩など身近なところに“普通の”当事者がいるという視点、その理解がもっと進んでほしいと考えます。

このことに限らず、諸悪の根源は人が自分の頭できちんと物事を考えられないことにあります。自分には関係ない、わからない、面倒くさいなどと言っているうちに、考えたり話し合ったりしただけで、あるいは不当な目に遭って異議を申し立てただけで、国にとって都合が悪いと判断されれば罪に問われる社会がもうそこまで迫っているではありませんか。

（阿部浩一）

### Hello! Movie

～映画の紹介～

スウィート 17 モンスター (2016年・アメリカ) ケリー・フレモン・クレイグ監督

『壁ドン』映画がすっかり定着し、甘い恋、キラキラした青春があふれる日本。そんな甘い青春への夢をふきとばすイタくてリアルな『あの頃』の物語がやってきた。誰もが共感せずにはいられない『スウィート 17 モンスター』。

17歳のネイディーンは、サエない女子高生。自分とは正反対のイケメンで、優秀な兄が大嫌い。ネイディーン唯一の理解者は親友・クリスタだけのはずだった。大嫌いな兄と大好きな親友が付き合うまでは……とにかく行動力と口だけは抜群のネイディーン。親友の恋にキレて『兄と私どっちを選ぶの! ?』と迫るわ、片思いのイケメンには下ネタまじりのとんでもない告白メールを送るわ、ささいなことで教師には『自殺する』と言い回るわ……まさにあの頃の自分を思い出してイタくなる人たちも多いことだろう。

かつて14歳にしてアカデミー賞にノミネートされた実力派で、最近では歌手としても絶好調のヘイリー・スタインフェルドがすべてにおいて暴走しがちなネイディーンを演じる。『壁ドン』映画のようなキレイさはなく、あの頃の思い出しハラハラしてしまう。ネイディーンが何でも打ち明ける歴史教師には『ハンガー・ゲーム』の名脇役、ウディ・ハレルソン。ネイディーンを甘やかさず、皮肉で率直な表現でやり込めつつ生徒を温かく見守る姿を好演している。青春って甘いものじゃない。暴走してキズだらけ。そんな『あの頃』を引きずりつつ、私たちは大人として今を生きる。（宮内華子）





ノスタルジックな街並み



時は七月。うだるような暑さの東京から脱出したくて選んだのは、なぜかベトナム・ハノイだった。暑いと分かっていたはずなのに、初めて訪れる国への楽しみの方が勝り、私はベトナムの首都・ハノイの街へと降り立った。案の定、空港を出た途端サウナのような熱気が体を包み、立っただけで汗が噴き出す。

街は一言でいえば「カオス」。独特な雰囲気は混沌と混ざりあっている。今まさに経済成長中の国だけあって、ガラス張りのキレイな高層ビルがあちこちに建てられていると思えばすぐ近所には、木造の細い家々がぎっしりと立ち並ぶ場所があり、線路のすぐ脇に物を並べて売っている人々がいる。歩道をスーツ姿のビジネスマンが颯爽と歩く傍らで、上半身裸のおじさんたちが椅子を並べ、酒を飲みながら喋っている。

車も多いが、なんといってもベトナムではカブが車道の主役。ホンダのスーパーカブが人気だとは聞いていたが、その数は生で見ると圧倒的だ。中でも交差点の煩雑ぶりがすごい。信号が青になった途端、レースの如くカブが一斉にスタートする。大抵は1~2人で乗っているが、3~4人で一台のカブに乗っているのも珍しくない。最高で6人乗りのカブも見た。また積んでいる荷物に驚く。トラックのタイヤや各種部品、ドラム缶のような水のタンク、家畜、人間ほどの大きさのマネキン、通常なら車で持ち運びそうなものでも、とにかくカブに積む(抱える)。交通法に寛大なのか、信号無視も当たり前。右折車と左折車と違反のカブが一気に走りだし、交差点はいつも乗り

物のスクランブル状態。歩道ですら、想像を超える動きのカブに轢かれそうになったり、荷台からはみ出した「なにか」に当たりそうになったりと、気が抜けない。何事もなく目的地に着くことが目的。まるで命がけのゲームだ。

首都ではあるが、洗練さには程遠いカオスな街。だが、その空気は力強く活気に溢れ、みんなが逞しく生きている。

(浅香友里)

## 投稿コーナー

### 徒歩1時間の小旅行 ~鎌倉の大イチョウへ会いに~

実家の母からとある用事のため、鎌倉への同伴を依頼された。鎌倉駅での待ち合わせは、午前9時30分。私は、ただ散歩をするため、1時間前に1つ手前の北鎌倉駅に着いた。紫陽花や紅葉の時期に何回か来たことはあるが、新緑の時期、しかも8時30分にやって来るのは初めてかもしれない。周辺のお店や見学施設はまだ開いていない。しかし、早い時間に到着できたことに得をしたような嬉しい気持ちになった。

あくまで目的は散歩をするためであって円覚寺、建長寺などの中には入らなかった。ただ、1ヵ所だけ立ち寄りたかった場所が鶴岡八幡宮で、そこの大イチョウを見たかった。数年前に倒れてからも生き続け、その姿は人々に勇気を与えている。右隣には、若いイチョウが植えられている。そして、左側には、「がんばれ!大イチョウ」と書かれた大きな絵馬が奉納されている。その絵馬には、様々な人々の言葉が添えられている。しかし、大イチョウは、「みんなの気持ちはありがたいが、私の応援をするよりも、自身の根を深く、幹を太く、枝葉を拡げて生きなさい」と言っているのではないだろうか。

ほどなくして、鎌倉駅近くで母と合流。徒歩1時間の小旅行。太陽の光を浴び、新鮮な空気を吸い込み、私の心に小さな新芽が生えた気がした。(中里美喜)

~本の紹介~

## 『GREEN BOOKS』

自己責任社会の歩き方 生きるに値する世界のために (2017年4月)

雨宮処凛 著 七つ森書館・1620円



プレカリアートという言葉を知ったのは今からちょうど10年前。「不安定」を意味する「プレカリオ」と「無産階級」や「賃金労働者」=プロレタリアートを併せた造語。当時の私は山口から上京して間もなく、NGO団体へ就職したことを機にさまざまな社会問題に取り組む仲間たちとつながり始めていた頃だった。

新自由主義、規制緩和、派遣切り、ネットカフェ難民などという言葉が浸透し始めて、それまでは日本にはほぼ無いものとされてきた、特に若者の貧困問題がクローズアップされ、2008年の年越し派遣村の出現で大きく可視化されることとなる。

本書はそうした過程で07年に『生きさせろ! 難民化する若者たち』を著し、自らもアクティビストとしてプレカリアート運動の最前線で声をあげてきた著者の新刊である。痛ましい相模原の事件、小田原市の「生活保護めんな」事件など、最近の出来事が取り上げられる中でこの10年、状況にほとんど変化はないことに愕然とする。持たざる者が権利を主張すると生意気だとか特権階級などと揶揄される。本書にもあるが、その攻撃は一生お金に困らない世襲政治家などには向かわない。世の中にはもっとつらい人がある(私だってがんばっている)のだから甘えるなどと言って黙らせていくことで、最後には苦しいと声をあげることができる人は一人もいなくなる。これを社会学用語で「犠牲の累進性」と呼ぶのだという。物言えぬ社会の足音が聞こえる昨今、もう虐げられた者同士がいがみ合っている場合ではない。そう思える一冊だ。(阿部浩一)